

学生の視点から臨床実習困難感を振り返って

学籍番号 05M2406 氏名 金子奈南夏

1. 研究目的

長期臨床実習(以下実習とする)中に何らかのきっかけで自信喪失や意欲低下などが生じ、実習に困難を感じる学生は少なくない。自分も精神面のコントロールに非常に苦労した経験から、実習困難感^{*}に対して学生自身の考え方や行動に問題点及び改善すべき点があったはずであると考えた。しかし、そのような実習体験を学生の視点から捉えた先行研究は少ない。そこで、同じように実習で悩んだ学生から当時の体験を聴取することで、実習困難感の要因と、学生自身がどのような思考過程で行動し対処したかを、学生の視点から明らかにしたいと考えた。

^{*}実習困難感...自信喪失・意欲低下など、学生が実習に対して感じるマイナスの気持ち・状態。

2. 対象と方法

1)対象とデータ収集方法

A大学在学中の理学療法学専攻4年生(全ての臨床実習を終了した者17名)に実習困難感のアンケートを行い、回答結果から、実習中に自信喪失或いは意欲低下した自覚があり、本研究法に同意を得られた者という条件のもと、本研究課題の対象者に適当であると思われる者(3名)を任意に抽出した。その後本人のアンケート回答を基に半構成的面接を実施し、音声でICレコーダーとビデオテープにて録音・録画した。

2)データ解析方法

得られた録音内容を逐語録とし、グラウンテッド・セオリー・アプローチ法に基づいて文脈に沿って内容をカテゴリー化し、タイトルを付けた項目とした。さらに各項目の関係を図式化することで、学生の実習への考え方や行動を考察した。

3. 結果と考察

- 1)実習経験：3回の実習中、1名が1回目、2名が3回目の実習であった。
- 2)困難感の原因：自己認識および他者(指導者・患者)との関係に関する内容が抽出された。
- 3)自己認識：「自分を客観視できない」「社会人としての態度が身につけていない」「口下手」「自己能力の過大評価」「完璧主義」等が実習困難感に関与したと思われるものとして挙げられた。これらの問題点はそれまで普段の生活ではあまり自覚することがなかったが困難感の経験により実感したと語られた。
- 4)指導者への思い：「感謝・相談しやすい・見守ってくれる」等の肯定的な思いと「遠慮・申し訳ない・気まずさ・不信感」等の否定的な思いが抽出された。
- 5)対処法：「指導者・学校教員等へ相談」「患者とのコミュニケーションを増やす」「自己改善点を見つけ目標を立てる」「積極的に行動する」「ストレス解消」といった積極的な方法もあるが、「本音を隠す」「問題を抱え込む」といった消極的な方法も挙げられた。また、「自分の問題点を自覚し対処できた」「問題点を自覚しつつもコントロールできず他者の力を借りて対処した」「当時何が問題点なのか分からず、対処しようとしたが解決に至らなかった」というケースが各1例であった。

4. 結論

実習困難感の要因としては、学生自身の自己認識内容や問題解決への思考過程の他、指導者への思いや関係も影響することが示唆された。対処については、自覚していなかった自身の新発見・再認識、指導者等の他者との関係性の構築、それらによる問題点の自己改善が有効であり、他者に頼らず自力で対応しようとする悪循環に陥る危険性があることが示唆された。今後、学生の実習困難感への適切な対応を検討するための課題としては、指導者等他者の視点を加える、性格検査等で学生の内面を示すなど、客観性を高めて分析していくことが必要である。